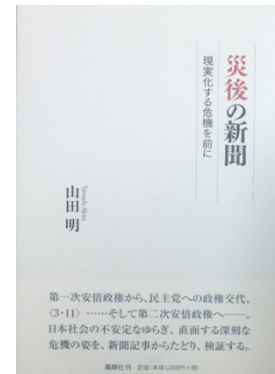


## 「災後」の未来のために

写真は拙著『災後の新聞—現実化する危機を前に』である。退職後に集中して作業をして、2014年8月に風媒社から出版した。久しぶりに読み返していたとき、社会学者の吉見俊哉さんが中日新聞3月22日夕刊に標題「社会時評」を寄稿していた。「災後」というタイトルに注目した。途中から紹介したい。



東日本大震災、そして福島第一原発事故とは何だったのか。この出来事の教訓は何か。震災後の歴史を「災後」と呼びことができるなら、それは敗戦後の「戦後」と何が異なるのか。

変化はまだ表にははっきり表れてはいない。震災後、農漁業は徐々に復活し、道路や街並みの整備も進んだ。工程表通りに作業を進めるのは日本の得意技だから、工事は着実に進む。他方、仮設住宅住まいの人は残り、家族を失った人の心の傷も癒えない。被曝で住民避難が長引いた地域では、野生動物が過剰繁殖し、人間が自然からの逆襲を受けている。

これらはしかし、表面上の推移である。震災を期に、この社会に地殻変動的な変化は生じたのか。

一方で、「生じていない」証拠はいくつもある。震災前に回帰すべく原発再稼働に向けた政策が打たれ、地方が国の公共事業に依存する体制も変化がない。東京オリンピックをめぐる問題の続出は、私たちが1964年の価値観から抜け出せていないことを露呈させた。沖縄問題、近隣諸国との関係、日米関係のいずれでも、日本が世界に向ける姿勢に変化がない。歴史の慣性が保たれている。

すると、震災後の日本の姿から出発した本欄は、何も変化がないことを5年間、検証し続けてきたのか。

それも単純すぎる理解だ。変化は生じていないわけではないのだ。見えないところで生じてきたと言うべきかもしれない。「見えないところ」とは、新聞やテレビ、東京中心の日本から見える視界の外である。

エドワード・スノーデン事件やパナマ文書報道は、私たちがこれまでとはまったく異なる情報の体制を生きていることを明らかにした。巨大化し、全地球を高速で移動し、高度な検索技術によって分析されていくようになった情報は、もはや「語られたこと」以上の何かである。

他方、越境的にネット化した環境では、「語ること」も集合化して大きな力となる。2015年夏の日本での「SEALDs」運動も、前年の香港や台湾での「雨傘」や「ひまわり」をシンボルにした運動も、確実にその流れの一部をなす。そして今、アメリカでは社会に根深いセクハラに抗議して、ネット上の「#Me Too (私も)」運動が政治的にも大き

な影響を生じさせている。「アラブの春」の背後にあった情報革命も、単に中東に混乱や反動、テロの拡散を生みだして終わったのではない。

今日、グローバル化とテロリズムの増殖、アジアでの日本の存在感低下の中で私たちは防衛的になっている。だがこの間、日本と世界の水位差も広がり続けてきた。変容する世界と変わらない日本、その間をせき止めていたダムは必ずどこかで決壊するだろう。その時、福島第一原発事故がそうだったような打つ手なしのメルトダウン状態にならない方策は用意されているだろうか。

実は、今ほど私たちに未来への信頼できるヴィジョンが必要なときはないのである。それには一時的な「夢」の心地よさに酔うのではなく、長い時間の中で自己を見つめる覚悟が必要だ。私はこれまで、震災・原発事故の記録を統合する記録庫の創設を訴えてきた。記録庫を通じて過去と正面から向き合うことが、社会が陥りがちな健忘症の治療薬となる。その記録庫が向けられる先は、半世紀以上先の未来である。その頃までにどのような「豊かな」社会を実現していくべきなのか、しっかりとしたヴィジョンがなければ廃炉作業一つ、脱原発一つできないではないか。

(2018年3月31日)